調査報告

泰山山麓題記調査報告

石野　一晴

はじめに

本稿は2007年4月に中国山東省泰安市で行った碑刻調査の報告である。筆者はこの調査に先立つ2002年8月にも泰山を登頂し，山麓から太平頂までの宮観および碑刻の分布を把握した。その後，2005年から2007年までの北京師範大学留学時に，泰山に関わる文献を調査した上で，すでに度重なる現地調査を行っていた山東大学の葉濤教授の助言を得て目的地を絞り込み，4月7日，8日，10日の3日間の調査を実施した。なお9日は済南の山東省図書館での文献調査にあてた。

このうち，4月10日に行った調査の成果は，すでに「17世紀における泰山巡礼と香社・香会―霊巌寺大雄宝殿に残る題記をめぐって―」として公開した[1]が，残りの調査概要の報告は行っていなかった。理由はひとえに筆者の怠慢によるのだが，現地の研究者による研究の進展も大きく関わっている。中華書局より全10冊の『泰山石刻』という一大叢書が出版されたことを知ったのは，調査を終え日本に帰国してからのことであった[2]。この書籍は泰山とその周辺に残されている石碑や磨崖碑刻を写真付きで網羅的に紹介したもので，簡体字ではあるが録文も載せられている。筆者の調査・撮影した碑刻は，大半が紹介されており，筆者が「発見」したものは無きに等しい。それどころか，筆者が見落としていた碑刻がいかに多いのか気づかされることになった。その後，『中国文物地図集』の山東省分冊も出版され，碑刻の所在について相当部分の情報が整理されている状況に鑑みて，残りの調査報告を公にすることの意義を見いだせずにいた。

しかし，改めて『泰山石刻』を通覧してみると，このような大部の資料集においては，やはり一定程度の誤りは避けがたいことに気づく。断碑について丁寧に録文を作成している部分がある一方で，判読が容易な碑刻の録文を省略するといった体裁の不統一も見られる。寄進者については往々にして概数を示すだけにとどまり，名前や出身地などは必ずしも記録されていない。補訂の余地は少なからず残っている。今後当地を訪れる研究者のためにも，ど

こに，どのような碑刻があるのか，『泰山石刻』の補訂も兼ねて簡潔にまとめておくことは一定の意義があるだろう。調査から10年近く経ったいま，ここに小文をまとめる所以である。

調査の際に目にした碑刻は数百に上るが，本稿では参詣者の題記に焦点を絞る。泰山に関わる寄進碑・題記は，泰山周辺の寺廟と参道の入り口部分に集中するため，今回は泰山の険しさを象徴する十八盤と呼ばれる階段や，参詣者の目的地である山頂付近の碧霞元君廟には触れない。通常の旅行ルートとは異なる泰山山麓の題記探訪の記録となることをあらかじめお断りしておく。

1．泰山山麓

まずは，泰山と泰安市の位置をおおまかに示そう。泰山は山東省の省都である済南から50 kmほど南に聳え立つ1500 mを超える山である。泰安の街は主要な登山口のある南麓に形成された。筆者が2002年に初めて泰山を訪れた際には，上海からの夜行列車で泰山駅に到着，そこから路線バスで市街へと向かった。2007年の調査の際は徐州・鄒県・曲阜を駆け足で巡ったあとに，4月7日の朝にバスで泰安に到着した。現在は郊外に高速鉄道の泰安駅ができ，北京・上海からの移動もかなり容易になった。

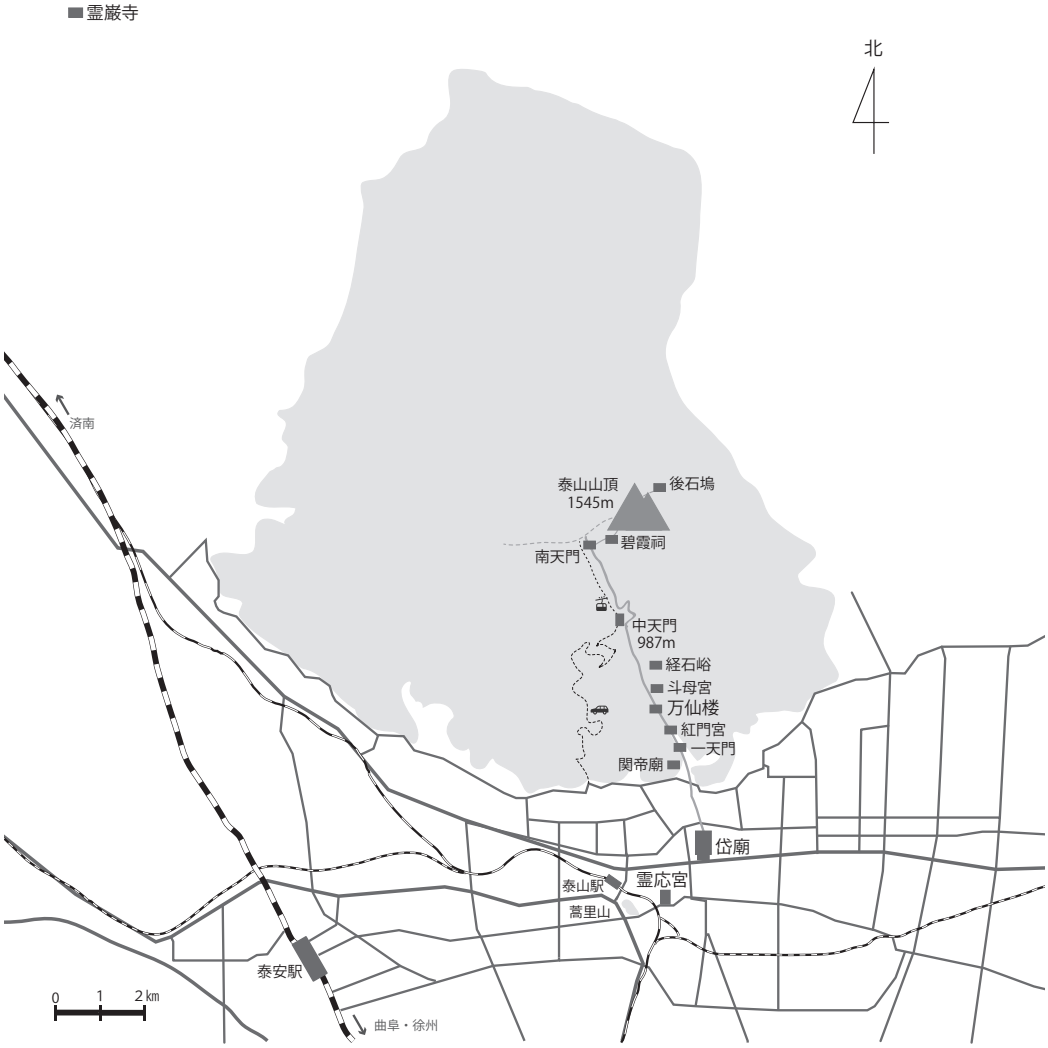
2007年の調査の目的は，山東大学教授の葉濤氏にご教示いただいた泰山西北にある霊巌寺の題記と泰山駅近くにある霊応宮の題記，および2002年に撮影できなかった万仙楼の題記を撮影することであった。当時は『泰山石刻大全』のような資料集や『泰山志』などの地方志，清代に著された石刻書などを頼りに碑刻の所在を調べていたが，題記や寄進碑についての情報は少なく，暗中模索の状態が長く続いた。それゆえ，事前に葉濤氏と連絡を取ることができたのは幸いであった。

2．霊応宮

4月7日，宿に荷物を置いた筆者は真っ先に霊応宮に向かった。宿から路線バスで泰山駅まで向かい，そこから1 kmほど歩く。現在は泰安市道教協会が置かれているこの宮観は，碧霞元君の行宮として信仰を集めてきた。筆者が訪れたときは，修復工事が行われているところで，観光客・参詣者はほとんどおらず，ときおり工事関係者が出入りするだけであった。

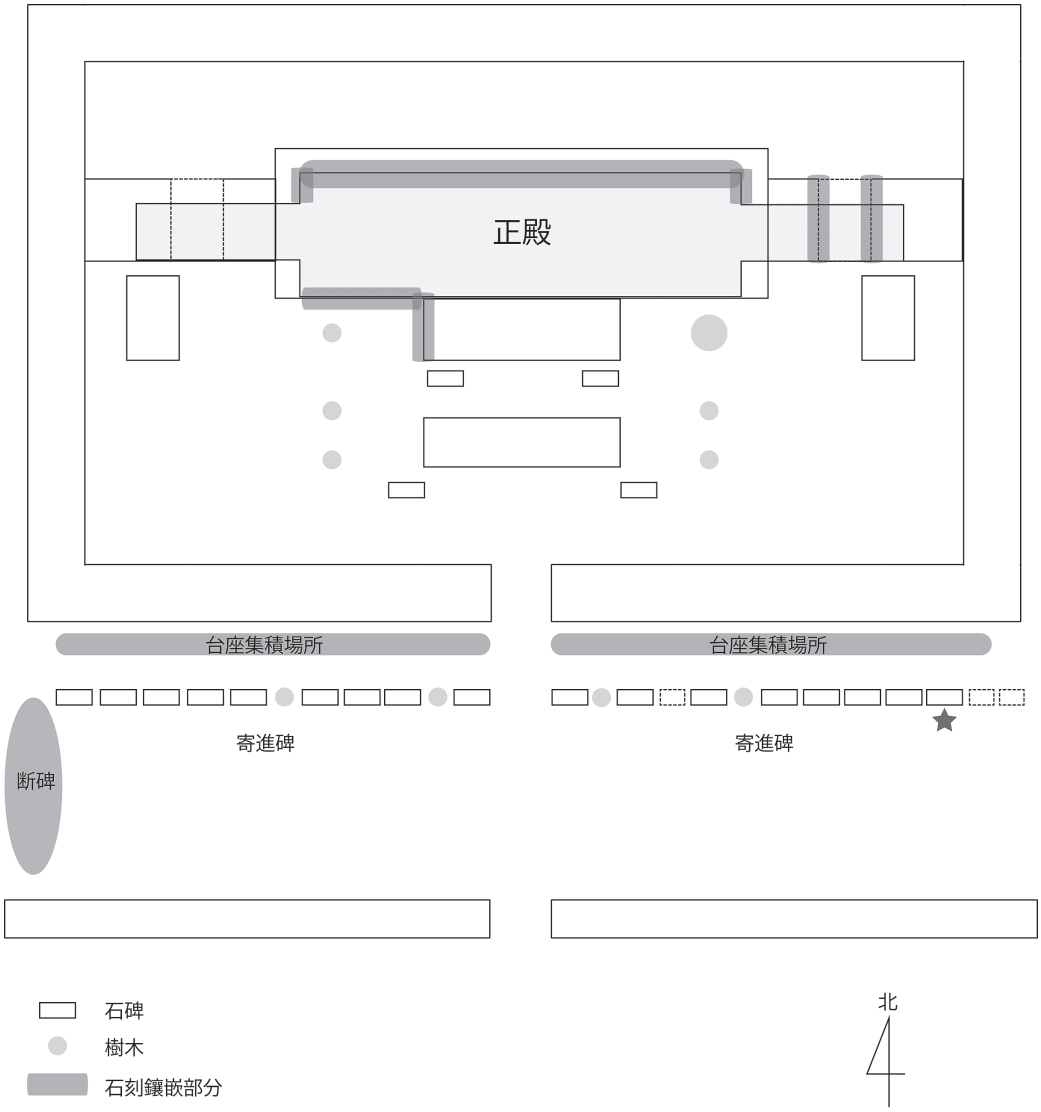
門をくぐると，霊応宮を背にして，高さ1 m前後の小ぶりの石碑が一列に並ぶのが目に入る**【写真1】**。

泰山周辺地図



これらには，参詣の記録が刻み込まれる。例えば**【写真 2】**の碑刻には右端に「大清国直隷河間府」の地名，そのあとに参詣者の名前，左端に「康熙二十八年三月十六日」の日付が記される。なお，**【写真 2】**の碑の左下に置かれているのは A4 大のバインダーである。筆者は，基本的にメジャーで碑刻の大きさを測っているが，単独で調査する場合や時間に余裕が無い場合には，スケール代わりになるものを準備している。撮影後，画像を見れば，おおよその大きさはわかる。スケールとしては B5・A4 などの定型ノートの方が好ましいが，軽いものは条件によっては垂直に置きにくいことがある。

全体の配置を見ると，向かって左手に 9 つの碑刻が立てられる。右手には 11 の台座があ



霊応宮平面図

るが，そのうち外側の２つは台座のみ，外側から３番目は断碑であった**【写真 3】**。つまり，左手に９つ，右手に８つの石碑が立っていた。

しかし，本稿をまとめる際にこれが『泰山石刻』の該当部分と合わないことに気づいた。『泰山石刻』では，外側から３番目は断碑ではなく，文字の判読できる保存状態のよい碑刻である[3]。筆者のメモの誤りかと一瞬戸惑うが，この康熙 39 年（1700 年）の日付を持つ山東莱州府の人々による碑刻は，２つの石をつなぎ合わせたあとが見える。筆者の撮影した写真と『泰山石刻』の写真を丁寧に付き合わせてみると，筆者が撮影した断碑の中に全く同じ

写真１　霊応宮正面

写真２　霊応宮の碑刻

文言が刻まれていた。形状も『泰山石刻』所載の修復部分と重なる**【写真 4】**。つまり，『泰山石刻』の写真は断碑の修復後の姿を反映していることになる。

さらに，筆者が訪れた際には，いずれの碑も彫りが浅く判読に苦労したが，『泰山石刻』は，墨らしきものが全面に塗られ，文字が浮かび上がり，判読しやすい状態になっている。奥付の出版日時から考えれば，筆者が調査する前の写真ということになるが，実際には着色・撮影は調査終了後である可能性が高い。この３日後に霊巌寺を調査した際には，何人かで拓本を取っている姿が見られたが，あるいはこのような着色作業であったのかもしれない。文物の保存の観点から見れば，碑刻への着色は避けるべきだが，ただの石材と間違えられて再利用されるよりは良い。このあたりは悩ましいところである。それ以外にも，『泰山石刻』の写真は石畳の雑草を取り除き舗装し直しているように見えるなど，筆者が調査したときよりも明らかに整然としている。

筆者が『泰山石刻』を初めて手に取ったのは，京都大学が当該書籍を購入したのちのことである。筆者は 2007 年 8 月中旬まで北京に滞在し，北京大学内の漢学書店や成府路の万聖書園，瑠璃廠の中国書店や文物書店など足繁く通っていたが，店頭に並んではいなかった。『泰山石刻』所載の写真は，筆者の調査終了後に撮影されたとみてよい。碑刻に残された文字を読み解くことの重要性に比すれば，写真の撮影時期など些細な問題でしかないが，書誌データ上の日付が，その写真が撮影された日時を必ずしも反映しないことは頭に入れておいた方がよいだろう。

霊応宮の碑刻はすべて清代のもので，康熙 15 年（1676 年）徐州蕭県の参詣者によるものが最も古い。このほかにも康熙年間のものが 6 つ残されている。いずれもこの霊応宮に立て

写真３　断碑１

写真４　断碑２

写真５　集められた台座

られていたが，1950 年代に所在不明になり，2001 年秋に修復工事を行った際に敷地内より出土されたという。

なお，石碑が並んでいる場所の左奥（西側）には断碑の山が存在する[4]。一直線に立ち並ぶ石碑の背後には，本来であれば，これらの石碑を納めていたはずの台座が空しく並ぶ**【写真 5】**。

その数は少なくとも 30。残された碑刻を上回る数が失われたのは間違いない。我々が目にする題記は，難を逃れた貴重な記録なのである。これらの碑刻を守ろうとした人々がいたことに思いを馳せるとともに，文物の管理・保護に携わられている方々の努力にも敬意を表したい。

残念なことに，この日の調査では，霊応宮の正殿にあると葉濤氏から伺っていた碑刻を見つけることができなかった。『泰山石刻』にはそれらの写真が多数掲載されている。録文は一部しか作られていないが，相当数の題記があることは写真だけで充分に伝わる[5]。場所は，正殿の裏側と，正殿の東側にあるアーチ構造の小さな門の中であった。管理人を探し当てることができず，正殿の裏側に回り込む方法を見つけられなかったのは仕方なかったとしても，正殿の東側にある門は確かに通った記憶がある。素通りしてしまったことは迂闊であった。ここには主に 19 世紀の題記が多いようである。

3．岱廟

午後になり岱廟へ向かう。まずは岱廟のすぐ南にある遥参亭に入る。門には真新しい「泰

山第一行宮」の額が掲げられ，門前の坊亭には乾隆35年（1770年）の落款を持つ「遥参亭」の題字が掲げられる。唐宋以前には「遥参門」と呼ばれ，泰山に登る人はここで礼拝した後に岱廟に入っていったという。つまりここが事実上岱廟の正門であった。明代に規模が拡大されて碧霞元君が祀られると，岱廟とは独立した建物となる。それからは，この地で碧霞元君を遥拝してから泰山に登ることが習わしとなった。この地の碑刻も一時的に地下に埋もれていたものが多く，題額に「禁止捨身」と書かれた康熙年間の碑文は境内の植林のため土を掘り返した際に見つけられ，清末の「合山会」の碑刻も1998年に出土したものである[6]。同碑は，筆者も撮影したが，画像処理をしても充分に文字を読み取ることができなかった。『泰山石刻』によると咸豊9年（1859年）のもので，この会に数千もの家が参加し，参詣者が雲集する遥参亭の地にやってきて祭祀をおこなったことが分かる。刻まれる題名は1000人を超える。録文では省略されているが，判読できる文字も多そうである。復元することができれば，清末における会の規模やネットワークの一端がわかるのではなかろうか。

遥参亭を後にして，岱廟の中に入る。門をくぐると多数の建築が立てられ石畳の道の脇にも多くの碑が立ち並ぶ。岱廟の重修の経緯を示した乾隆35年の石碑をはじめ岱廟にもとから立てられていたと思しきものもあるが，近隣で出土した碑刻をこの地に集めてきているようだ。たとえば，「大元太師泰安武穆王神道之碑銘」は高さ7mを超える巨碑であるが，かつて泰安城西にあった練兵場に立てられていたものであった[7]。ほかにも泰安駅の西南にある蒿里山に立てられていたもの，開発の際に偶然に掘り出されたもの，実に様々な来歴の碑刻がここに集まる。唐代のものをはじめとする重要な碑刻は，炳霊宮内部の碑廊中に保存される[8]。岱廟全体が，さながら「泰山石刻博物館」の体をなしている。

岱廟に存する碑刻は石刻書に記載がある著名なものばかりであり，筆者が探し求めていた巡礼関係のものは少ない。しかし，筆者の研究上有益な文物にいくつか出会うことができた。その一つが，北門のやや西側にある六角形の鉄塔である**【写真6】**。この鉄塔は3層で，さほど大きなものではない。しかし，嘉靖12年（1533年）に泰安州城西郊の碧霞元君行宮に建てられた際には，13層に及ぶ高層の塔であったという。今のような姿になっているのは日中戦争時の空爆による。焼け残った部分は1973年に岱廟に移された[9]。この鉄塔が興味深いのは，それぞれの面に寄進者の名前が所狭しと並ぶことである。地名を見ると「原武県王村店十方功徳施主方（ママ）名」「河南布政使司開封府原武県会頭賀□□」「懐慶府武渉県」「懐慶衛軍余王化営善人」などの文字が見られ，河南からの寄進が多かったことが見て取れるが，河南懐慶府河内県清上郷李家村の金火匠張慶らによって嘉靖十二年八月に鋳造されたことが塔の一部に記され，「大明国河南懐慶府武渉県木栾店南頭三官廟安炉鋳造宝塔本店施財功徳善信施主花名于后」との文言などから，河南省懐慶府を中心とする地域からの寄進によって

写真６　岱廟の鉄塔

写真７　岱廟門上の梵鐘

鋳造されたことが推測される。光を反射するので，逆光になる部分だけでなく，太陽光の当たる部分も撮影しづらい。結局翌朝にもう一度撮影に来ることにした。

もう一つの文物は，岱廟の正門の上にあった梵鐘である**【写真 7】**。懐慶府河内県の金火匠によって嘉靖元年孟冬十月吉日に鋳造されたもので，寄進者の名前が刻まれる。鉄塔に比べれば寄進者の数は少ないが，一族で寄進したと思われる記述が見られるなど興味深い記述に富む。改めて考察したい。

岱廟を隅々まで巡れば他にも何らかの成果が得られるのは間違いなさそうだが，本来の目的地は別にある。名残惜しいが，岱廟を後にする。時計はすでに 17:00 を回っていた。あとは日が暮れるまで泰山の麓にある碑刻を見て回ることにする。岱廟の北門を出て，岱宗坊をくぐり，泰山の登山口へ向かう。一天門の前には嘉靖年間の「盤路起工処」や隆慶年間の「天下奇観」といった堂々たる題字が目を引くが，その手前西側に関帝廟が建てられている。創建年代は不詳だが，明代に遡ることは間違いない。碑刻には，泰安の塩商はみな山西出身者で，郷里の信仰対象である関羽をここに祀ったことが記される。さらにこの地の典当業（質屋）も山西商人が担っており，彼らの資金で規模が拡張されて今に至っている。

さらに北に進むと，紅門宮があり，内部には 30 余りの明清の碑刻が残される。そのうちの一つ光緒 19 年（1893 年）の碑刻は彼らがに「すでに遥参亭に碑を立てた」ことを記して

写真８　紅門宮に残る寄進碑

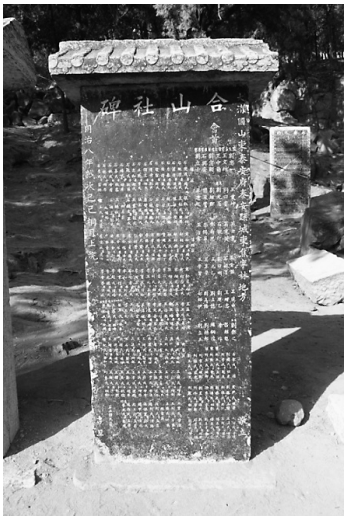


写真９　参道の題名碑

いる【写真 8】。おそらく先述の咸豊年間の合山会の碑刻のことを示しているのであろう。

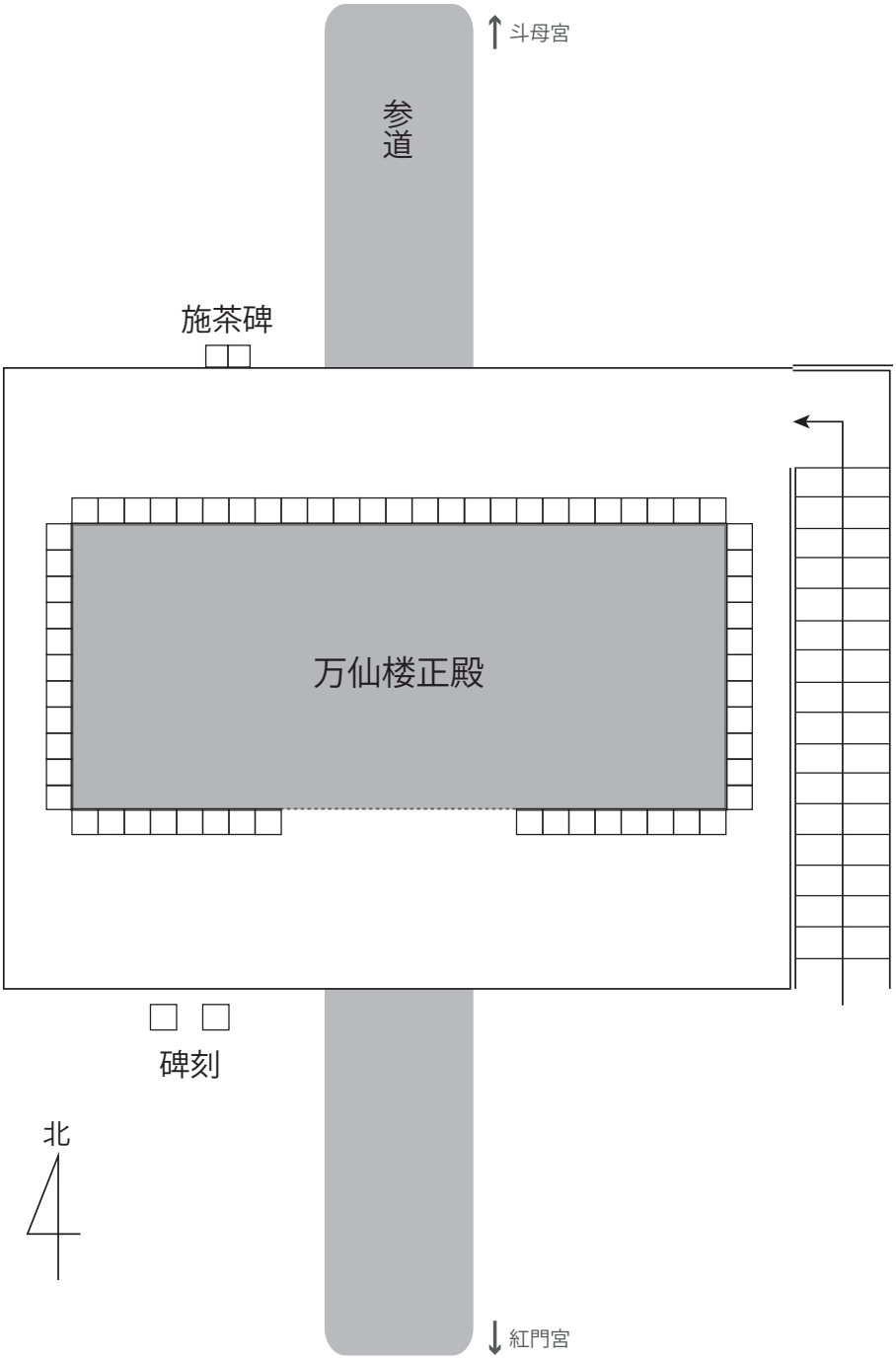
紅門宮からさらに北へと進むと左手に碑刻が散在するのが目に入る。いずれも参詣者の題名が刻まれたものであった。時代は清末から民国のものに限られるが，保存状態が良好で文字がはっきりと判読できるものが多い【写真 9】。『泰山石刻』に録文が記されるため，ここでは詳述しない[10]。なお，これらの碑刻がもとからこの場所に立てられていたのかはわからない。

この北にも万仙楼・斗母宮などに複数の題記があることは分かっていたが，さすがに薄暗くなり撮影もできそうにないのでこの日は調査を終えて引き返すことにする。

4．万仙楼

4 月 8 日はまず早朝に岱廟で昨日撮影できなかった鉄塔の撮影を済ませてから，調査の主要目的地の一つである万仙楼へと急ぐ。万仙楼は二階建ての作りになっていて，下層はアーチ状の門になっておりそのまま通り抜けることができる。本殿には右手の階段から上層に上る。

2002 年に何も知らずに階段を上っていくと，すぐ目に飛び込んできたのが，この建物の四面に塡め込まれた題名碑であった。『泰山石刻』によれば，その数は 3 万を超える[11]。とても手書きで写し終えられるものではない。筆者は，思いもかけぬ収獲に欣喜雀躍したが，カメラを取り出すと管理人に制止された。どうやら当局の許可が必要とのことで，当時は諦



万仙楼平面図

めるほかなかった。2007年の調査では，留学先の北京師範大学に紹介状を作成してもらったため，快く撮影を許可された。なお，『泰山石刻』では「捐修万仙楼信士題名碑」と名付けられているが，一連の碑刻に明確な題名が記されているわけではない。あくまでも『泰山石刻』編纂者側が名付けたものである。このような事例は多いので注意が必要である。

石碑の数は合計63。建物の正面（南側）に16，中央に建物の入り口があるので，その左右に8つずつの石碑が塡め込まれている。建物の東西には11枚ずつ，北側には25枚の石碑が塡め込まれている。碑高約129 cm，高さ4尺余りといったところか。幅も約52 cmでほぼ統一されており，文字の大きさや字体にもおおむね共通性がある。しかし，名前の書き方，格子状の線の有無など，違いは少なくない。同時期に，全ての題名が彫られたわけではなさそうだ。『泰山石刻』では，これらの碑石は万仙楼建築時に寸法を測ってはめこんだとするが，東側と西側にそれぞれ煉瓦で隙間を埋めている部分があること，北側には明らかに他よりも細い碑石があることはどう説明したら良いのだろうか**【写真10】**。

個別の碑石を見ると，上下左右の端が破損しているものが多く，文字が切れていることもある。これは一度外した碑石をあとから塡め込んだことによるのではないか。半分に割れた碑石を金具でつなぎ合わせているものが複数あることから考えても，これらの碑刻も一時的にどこかに隠されていたか，あるいは裏返しにされたりしていたのではないか。そして碑石

写真10　万仙楼西側

が嵌め込まれる順番も，立碑時の状況を反映している保証はない。

北側にある「朝山進香碑記」は天啓三年十月十六日吉旦の日付が刻まれ，「崇禎歳次丁卯季冬（1627 年 12 月）」，「崇禎六年三月」，「崇禎□年四月」などの日付が見られることから，これらが明末の比較的短い期間に彫られたものであることが推測できる。崇禎六年三月の日付が書かれた碑には，寄進の経緯が記される。判読の難しい文字が多く，まだ録文を作成できていないが，この碑が作られた由来を明確にできそうだ。

判読しやすい人名をざっと眺めてみると，衍聖公つまり孔子の嫡流の名も記される。「衡府進香朝山酬神建醮施財碑記」と題された碑石には青州の衡王はじめ王府の人々の名前が多数見られる。

地名は，山東省が中心で，それに河北省や山西省の地名が加わる。「新城県善人碑記」と上部に書かれた碑刻**【写真 11】**は会首の名前が書かれた後，第一牌・第二牌とグループ分けされて人名が記述される。合計で第六牌まであり，後から補刻したと思われる文字が散見される。香社・香会を知る上での手がかりを得られるのではなかろうか。

今回の調査でほぼ全ての碑石を撮影することができた。「全て」ではないのは，本殿の周辺には法具などを納める簞笥などが多数置かれており，一部は自力ではとても動かすことができなかったからである。幸いに『泰山石刻』の写真を見れば撮影できなかった部分もおお

写真 11　新城県善人碑記

むね把握することができるが，事前に当局と連絡を取り，撮影に適した環境を整えてもらう周到さと，その場で交渉して極力物品を移動させ，少しでも良い条件で撮影するような執念があっても良かったのではないかと反省している。

万仙楼の門前には，ふたつの碑刻が立てられる。左側の碑刻は判読困難だが，右側は咸豊年間の重修碑であることがわかる。門内には万暦年間の碑刻が嵌め込まれ，いずれも題額部分に「施茶碑記」とあり，この地で喉を渇かした参詣者のために茶を振る舞っていたことを知らせる。万仙楼の裏手にも，後壁に２つの碑が塡め込まれていた。やはりこれも参詣者のために茶を施していた人々の作った碑刻である。康熙年間のもので，人名らしきものがかすかに読み取れる。

ここから参道を先に進むと，斗母宮に「天啓三年歳次癸亥孟冬二十日」の日付が記された宦官の題記があるが，万仙楼でかなり時間を費やしたため，今回は撮影を諦め，次の目的地である済南へ向かうことにする。なお，万仙楼からケーブルカーの駅がある中天門の間にもいくつかの題記がある。たとえば，金剛経の磨崖刻石のある経石峪は参道から少し道を逸れるが，かつて泰山を登る者が茶を飲み休憩する場所であった。多くの文人による題字が残されているのはそのためである。中天門からさらに厳しい坂道を登り，泰山頂上（太平頂）に達すると，登頂を果たした人々による題名が数多く記されるが，それについては『泰山石刻』を参照されたい[12]。

5. 霊巌寺

４月８日夕刻に済南に移動，９日は山東省図書館での文献調査にあて，10日の早朝から霊巌寺の調査を行うことにした。公共交通が不便で，なおかつ調査そのものにも時間がかかることが予想されたので，済南からタクシーをチャーターした。

筆者が探し求めていたのは，この寺の大雄宝殿の外壁に嵌め込まれる題記であった。調査内容はすでに「17世紀における泰山巡礼と香社・香会―霊巌寺大雄宝殿に残る題記をめぐって―」として公開しているので，詳細はこちらを参照されたい[13]。

調査は，まず全ての石板の配置図を作成し，それぞれの石板に番号を付けることから始めた。そして，特徴などのメモを作成した上で，番号の順に一枚一枚の石板を撮影した。一見すると，何も書いていないように見える部分もひとまず撮影したところ，帰国してから画像処理を施しながら精査すると，かすかに文字が浮かび上がってくるものもあった。

撮影の際には，団体観光客が何回か訪れたが，一見すると何の変哲もない壁に向かって一人で写真を撮影し，時折メモを取ったり，腕組みをして何事か思案したりしている筆者に興

味が向いたのか，観光ガイドや観光客，はては当地に修行に来ているという道士にまで声をかけられた。本殿の外壁に文字が書かれているとは，思いも寄らなかったようで，筆者の話に一様に驚きの声を上げていた。

延々と 200 枚以上の写真を撮影しているうちに，数時間が経ち，日も傾き始めた。霊巌寺境内には貴重な碑刻が多数残されているが，それらをじっくり見ている時間はなかった。家路を急ぐタクシーの運転手に急かされる形で，霊巌寺を後にする。

おわりに

3 日間にわたる調査の概要は以上である。日程は限られており，見落としも少なくはなかったが，短期間の調査としては十分な成果を得た。

調査結果と比較した結果，『泰山石刻』は注意して用いる必要があることが分かったが，これだけの数の碑刻を収録している書籍はほかにない。泰安郊外の寺廟にも多くの題記が残されていることを知り得たことで，同地を再訪する意欲を新たにした。

しかし，泰山に残されている文物はあまりにも膨大である。網羅的な調査は個人のよくなし得ることではない。霊巌寺大雄宝殿の題記の悉皆調査では一定の成果を挙げることができたが，今後，筆者がこのような調査を頻繁に行うことができるかどうか，甚だ心許ない。やはり現地の研究者の協力を欠くことはできないだろう。幸い泰山学院の周郢氏をはじめとして，泰山について博識を誇る研究者が多数いる。この地道な作業を行ってくれる研究者が少しでも増えてくれることを願っている。

末筆ながら，題記の場所を快く教えてくださった葉濤教授には改めて感謝申し上げたい。葉濤氏の博士論文を北京師範大学の図書館で見つけなければ，今回の調査は単なる物見遊山に終わっていたかもしれない。そして，多忙ななか紹介状の発行をしていただいた王東平先生を初めとする北京師範大学の先生方，事務方の先生方のお陰で，非常に効率的に調査を行うことができた。泰山だけでなく，普陀山等の現地調査が順調に進み，その途上で各地の善本に直に触れることができたのは，諸先生方のお陰である。改めて心より感謝申し上げたい。

注

［1］ 石野一晴「17 世紀における泰山巡礼と香社・香会―霊巌寺大雄宝殿に残る題記をめぐって―」『東方学報』86, 2011 年。

［2］ 袁明英主編『泰山石刻』中華書局，2007 年。

［3］『泰山石刻』p. 623。

［4］『泰山石刻』pp. 658-pp. 664。

［５］『泰山石刻』第二冊，pp. 640-657。
［６］『泰山石刻』第二冊，pp. 343-344。
［７］『泰山石刻』第二冊，pp. 357-359。
［８］『中国文物地図集』山東分冊，p. 489。
［９］『中国文物地図集』山東分冊，p. 488-489。
［10］『泰山石刻』第三冊，pp. 703-717。
［11］『泰山石刻』第三冊，pp. 731-743。
［12］主に『泰山石刻』第四冊，第五冊に書かれる。
［13］石野前掲論文。なお，修訂した中国語版も近日中に公刊される予定である。

（いしの　かずはる　　学習院大学国際研究教育機構 RA）